

東日本大震災からの復興のための実践活動及び研究” 成果報告書

1. 実践活動・研究の名称

震災後の乳幼児の行動・情動変化の理解と対応に関する実践的研究
－東日本大震災後の保育所における問題と対応－

2. 実践活動・研究の成果

(1) グループ代表者

氏名： 本郷 一夫

所属・職名： 東北大学大学院教育学研究科・教授

(2) 構成メンバー（ 5 ）人

氏名： 加藤 道代

所属・職名： 東北大学大学院教育学研究科・教授

氏名： 神谷 哲司

所属・職名： 東北大学大学院教育学研究科・准教授

氏名： 飯島 典子

所属・職名： 聖和学園短期大学・准教授

氏名： 平川 久美子

所属・職名： 東北大学大学院教育学研究科・博士課程後期

氏名： 進藤 将敏

所属・職名： 東北大学大学院教育学研究科・博士課程後期

震災後の乳幼児の行動・情動変化の理解と対応に関する実践的研究

—東日本大震災後の保育所における問題と対応—

本郷 一夫¹・加藤 道代¹・神谷 哲司¹・飯島 典子²・平川 久美子¹・進藤 将敏¹
(¹東北大学大学院教育学研究科・²聖和学園短期大学)

【問題と目的】

2011年3月11日に発生した東日本大震災後、私たちは保育所・幼稚園の乳幼児への支援を行うために、子どもを取り巻く重要な人的環境である保育者に対する支援を行ってきた。具体的には、(1) 仙台市、気仙沼市、利府町などにおける保育所・幼稚園の保育者を対象とする研修会の実施、(2) 個別の事例についての相談・助言、(3) アンケート調査を実施した。保育者向け研修会はこれまでに20回を超え、その活動は現在でも継続している。

そのうち、本報告では2011年5月および2012年2月に行った研修会で実施した。アンケート調査の結果から、震災2か月後、震災11か月後の保育所における子どもと保護者の様子についての記述に基づき、震災が子どもに与えた影響について考察することを目的とする。

【方法】

1. 調査日： 2011年5月、2012年2月。
2. 対象： 研修会に参加した保育士。2011年5月には仙台市内の97か所の保育所の保育士、2012年2月には仙台市内の46か所の保育所の保育士が参加した。
3. 手続き： 2011年5月13日に実施した「東日本大震災後の子どもの理解と支援」の研修会と2012年2月21日に実施した「震災後の子どもの理解」の研修会においてアンケート調査を実施した。アンケートは事前にあるいは研修会の当日に持参してもらった。
4. 調査内容： 2011年5月のアンケートでは①子どもの保育全般、②特別な配慮をしていた子（障害をもつ子・「気になる」子）について、③保護者について、それぞれ「A. 現在困っていること」、「B. 一時期は大変だったが、現在は解決に向かっていていること」について尋ねた。さらに、研修会の事後にも研修会およびワークショップの感想を尋ねた。また、2012年2月のアンケートでは、①「子どもの保育全般について困っていること」、②「保護者への対応について困っていること・気になっていること」について尋ねた。

【結果と考察】

1. 子どもの保育全般について（震災2か月後）

現在困っていることとして、〈不安・怯え〉（22例）が最も多く、次いで〈地震ごっこ・津波ごっこ〉（20例）、〈音への過敏性〉（13例）などが報告された（図1）。〈不安・怯え〉についての具体例としては、「地震という言葉を知ると不安な表情になる」「余震に対する怯えが続いている」などが挙げられた。これに関連して「ひとりでトイレに行けない」「午睡時に眠れない、短時間で起きてしまう」なども報告されていた。

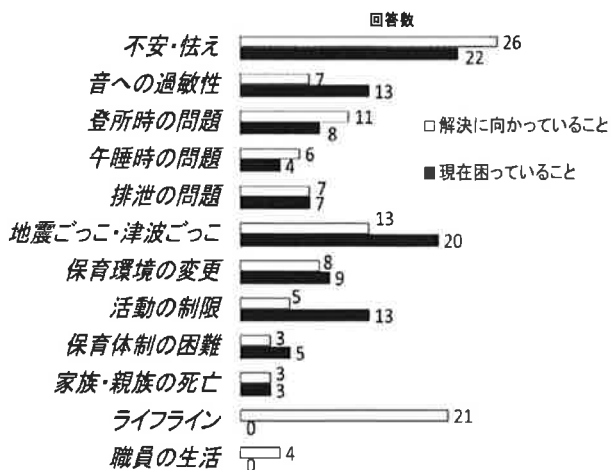


図1 震災2か月後の子ども・保育全般

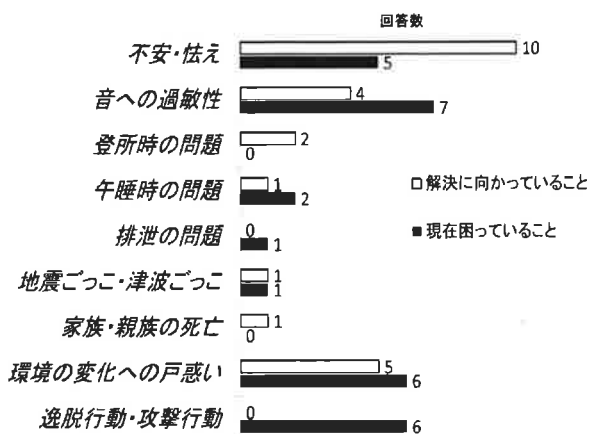


図2 震災2か月後の特別な配慮をしていた子ども

2. 特別な配慮をしていた子（障害をもつ子・「気になる」子）について（震災2か月後）

図2に示されるように、現在困っていることとして、＜音への過敏性＞（7例）に関する報告が最も多く、これは子どもの保育全般において指摘されたことと同様であった。具体例として、「小さな物音にも敏感に反応する」、「テレビやラジオ、携帯電話の緊急地震速報の音に敏感に反応する」などが報告された。また、次に多く挙げられた＜環境の変化への戸惑い＞（6例）の中には、「4月にクラス替えを行い、5月に職員の人事異動があったことによる環境の変化」といった人的な環境変化が含まれていた。

3. 保護者への対応について（震災2か月後）

図3に示すように、現在困っていることとして、＜保護者自身の問題＞（20例）が最も多く報告された。この中には、避難所生活での疲労の蓄積、震災による失業、収入が減少したことへの不安などが含まれていた。その他にも、「保護者が保育所に様々な支援や提案を行ったが、保育所側がそれを受け入れないことに対して保護者が不満を持っている」といったことも報告された。

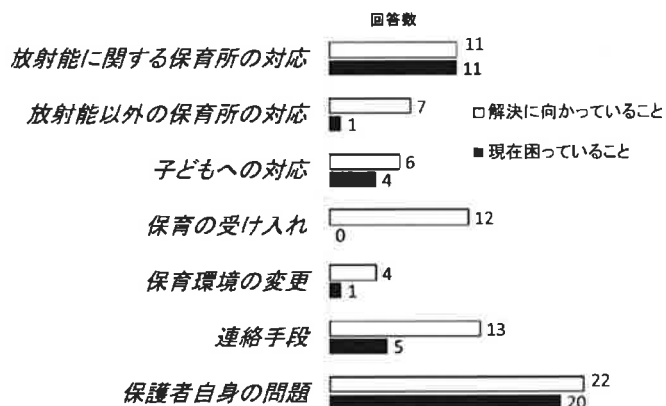


図3 震災2か月後の保護者への対応

4. 研修会の感想について（震災2か月後）

2011年5月に行われた研修会は講話とグループワークから構成された。このうち講話の感想として最も多かったことは、「自分自身の健康の大切さを改めて感じた」「元気なことが支援の一步と聞いてほっとした」といった＜セルフケアの重要性＞（48例）についてであった。また、＜長期的な見通しを持って支援することの必要性＞（40例）、＜震災直後における子どもの心身の変化＞（20例）について学んだといった感想も見られた。さらに、ワークショップの感想については、＜他の園との情報交換ができて良かった＞（64例）、＜当時の思いを共有できた＞（28例）、＜自分の取り組みを振り返る機会になった＞（23例）といった内容が多く挙げられた。

5. 子どもの保育全般について困っていること・気になっていることについて（震災11か月後）

震災11か月後においても、依然として＜不安・怯え＞（12例）、＜音への過敏性＞（12例）、＜地震ごっこ・津波ごっこ＞（11例）が多く報告された（図4）。このうち＜地震ごっこ・津波ごっこ＞については、年末・年始に多く放映されたテレビ映像の影響があると考えられる。また、＜その他＞（13例）の例としては、「チックがみられる子どもの症状が避難訓練時になると特にひどくなる」、「子どもたち（5歳児クラス）の落ち着きがない」、「住居が流され今までより狭い環境で暮らす中、“静かに”と言われることが増えているようで、保育所での声や動きが大きくなった子もいる」、「原発問題を心配して家庭から弁当を持参して食べている子どもの食欲が落ち、残食が目立つ」などが挙げられていた。

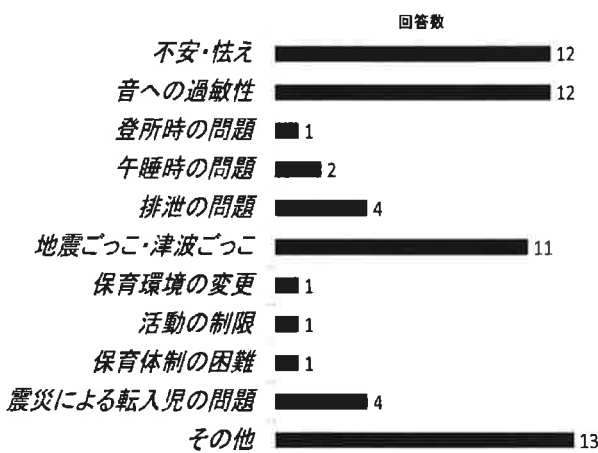


図4 震災11か月後の子ども・保育全般

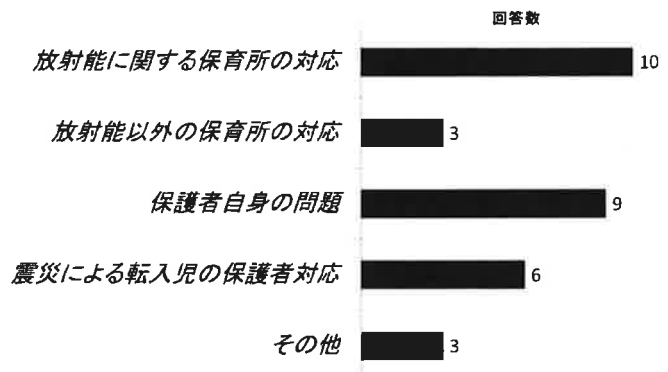


図5 震災11か月後の保護者への対応

6. 保護者対応について困っていること・気になっていることについて（震災11か月後）

主な報告として＜放射能に関する保育所の対応＞（10例）、＜保護者自身の問題＞（9例）、＜震災による転入児の保護者対応＞（6例）が挙げられていた。特に＜保護者自身の問題＞については、「震災を機に祖父母と同居」「父親の仕事の都合で家族がばらばらに暮らすことによる環境の変化」「転職や休職中」などによって「保護者が落ち着かない状況にある」ことが指摘されていた。加えて、「震災後、恐怖から心を病んで仕事に出られなくなった保護者がいる」ことも報告された。また、＜震災による転入児の保護者対応＞の例としては、「福島から避難してきた子どもの母親が初めての場所で不安な様子が見られる」「被災地から転居し、夫が忙しいため子育てを一人で抱えている母親がおり、急に気持ち沈んだり、子どもの身なりにあまりかまわないことが気になっている」などが報告された。

【まとめ】

東日本大震災後の支援において、私たちは主として保育所・幼稚園の子どもと子どもを取り巻く人々への支援に関わる実践的活動と研究を行ってきた。これらの震災後の支援活動を通じて、私たちは、東日本大震災からの復興に対して次のような貢献ができたのではないかと考える。第1に、震災から間もない時期に保育者を対象とした研修会を実施したこと、事例検討会を実施したことにより、震災が子どもに及ぼす影響に関する最新の知見を保育者に知らせることができたと考えられる。これによ

って、保育者自身が自分の保育を確認し、自信をもって保育に当たることができたのではないかと考えられる。第2に、研修会やグループワークを通じて、保育者に保育者自身のセルフケアの重要性を伝えられたと考えられる。震災直後から多くの職員・専門家が復興・復旧に貢献してきた。保育者自身もそうである。たとえば、仙台市の公立保育所は震災の翌日から閉鎖することなく保育を継続してきた。そのような中で、保育者は自分自身の活動に誇りを持つと同時に疲れも感じていた。そのような中で研修会を実施して、保育者自身のセルフケアの重要性を伝えられたことは良かったのではないかと考えられる。

最後に、これまでの活動を通じて私たちが感じたこと、学んだことを述べることにする。すなわち、私たちは、時間経過と環境変化を考慮した支援の重要性について改めて気づかされた。当然のことながら、震災の影響は時間とともに変化してくる。その影響の強さや現れ方は子どもの年齢や個人の特徴によって異なるだけでなく、同時に子どもの置かれている環境によって大きく左右される。したがって、震災そのものの体験からもたらされた影響だけでなく、その後の環境の変化との関連を捉え、時間軸の中で子どもを理解し、支援していく必要があると考えられる。その際、環境には、自宅、避難所、仮設住宅といった住環境だけでなく、保護者の状態といった人的環境も含まれる。また、2012年になってから再びく地震・津波ごっこ>が増えた背景としても指摘したテレビの影響も環境の影響として捉えるべきであろう。このような多様な環境の変化と時間軸の2つの次元を考慮した中・長期的視点が一層求められると考えられる。

以上の点を考えながら、今後とも支援に関する実践と研究を継続していきたいと考えている。

参考文献

- 本郷一夫 2011 子どもと子どもを取り巻く人々への支援の枠組み. 発達, No.128, 2-9, ミネルヴァ書房.
- 本郷一夫・加藤道代・神谷哲司・飯島典子・平川久美子・進藤将敏 2012 東日本大震災における乳幼児・児童のストレスとその対応 1. 日本発達心理学会第23回大会 名古屋国際会議場

2012年 9月30日

“東日本大震災からの復興のための実践活動及び研究” 会計報告書

活動・研究名称	日本心理学会2011年度研究助成金 震災後の乳幼児の行動・情動変化の理解と対応に関する実践的研究	
代表者 氏名・所属	本郷 一夫	東北大学大学院教育学研究科 教授

1. 助成額	¥900,000
2. 支出合計	¥900,000
(1) 機器・備品	¥0
(2) 消耗品	¥735,240
1) ノートパソコン 1台	¥168,200
2) ビデオカメラ 1台	¥97,650
3) バッテリー 2個	¥19,950
4) チャージャー 1個	¥9,975
5) キャリングケース 1個	¥3,675
6) SDHCカード 2個	¥8,820
7) ペンタブレット 1個	¥16,800
8) ノートパソコン 1台	¥115,500
9) BDドライブ 2個	¥39,600
10) HDD 6個	¥75,600
11) ムービー(ビデオカメラ) 1台	¥75,500
12) トランシーバー 3台	¥37,800
13) ビデオカメラアクセサリキット 1セット	¥14,700
14) ムービーライター 2個	¥42,000
15) イヤホン 3個	¥2,910
16) SDカード 2個	¥6,560
(3) 旅費・交通費	¥90,060
1) 本郷一夫 (仙台-南三陸・気仙沼) 往復	¥10,440
2) 平川久美子 (仙台-南三陸・気仙沼) 往復	¥9,540
3) 進藤将敏 (仙台-南三陸・気仙沼) 往復	¥9,540
4) タクシー借上 (一ノ関-南三陸-気仙沼)	¥30,000
5) 進藤将敏 (仙台-川崎) 往復	¥30,540
(4) 謝金	¥29,700
1) アルバイト2名(5時間*4回・5時間*2回)	¥29,700
(5) その他(一般管理費)	¥45,000

※ 領収書は各費目ごとにA4用紙に貼付し、通し番号を付けてください。